
仮面ライダー電王LYRICAL人気投票

皆大好

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王LYRICAL人気投票

【Nコード】

N65200

【作者名】

皆大好

【あらすじ】

第一部が完結したと同時に始まった人気投票。

遂にその結果発表が行われようとしている。

仮面ライダー電王LYRICAL人気投票結果、ついに発表。

これが本当の第一部クライマックス？

ここは『キングライナー』の中にある一室でもなければ、『翠屋』でもなく、『デンライナー』の食堂車輛でもない。

全く別の場所だ。

普段は全く使われることのない場所だが、何がしかのイベントの際には使われることがある。

敢えて名称をつけるならば『特別会場』とでも名付けよう。

この会場は現在とても賑わっていた。

その証拠に入口ではこれから始まるイベントに参加もしくは観客として来場してくる人々をオオカミとペンギンとゾウとドラゴンの着ぐるみが踊ったりして出迎えていたのだ。

同じ様に入口ではイベントのパンフレットを二十歳前の青年と小学生くらいの少女が来場者に配っていた。

そして、二人よりは年上とも思われる女性が来場者を席に案内していた。

「オーナーが用意してくれた特別会場^{こく}って、普段はどうなってるのかしら？」

パンフレットを配っていた小学生くらいの少女――コハナが隣にいる青年に尋ねる。

ちなみに普段の服ではなく、ドレス姿である。

「多分、使われていないんじゃないかな。何せ特別、だからね」

青年――野上良太郎が当たり障りがないように答えた。

彼もまた普段の私服姿ではなく、タキシード姿である。

二人の手にはもうパンフレットはなくなっていた。

「私達の仕事も終わったし、そろそろ席に戻りましょ」

「そうだね」

二人は入口から会場内に入っていった。

良太郎とコハナは会場内に入ると、そこは来場者が談笑をしたり、一人で食事や酒を楽しんだりなど様々な光景が二人の双眸には映っていた。

「あ、良太郎！」

ドレス姿の金髪少女が良太郎と目が合うと、笑顔でこちらに寄ってきた。

ドレスなので走ることはあえて自重していた。

フェイト・テストロッサである。

「フェイトちゃんもここに？」

「うん。なのは達も来ているよ」

フェイトが顔を向けている方向に良太郎とコハナも顔を向ける。

そこには高町家ご一行がいた。

全員正装している。

アリサ・バニングスや月村すずか、そして月村家の面々もいたりする。

こちらもやっぱり正装していた。

「今日は一人で？」

「ううん。アルフやリンディ提督達と一緒に来たんだ」

首を横に振ってから答えるフェイト。

良太郎はハラオウン家＋２（＋２はフェイトを除くとアルフとエイミー・リミエッタ）を見つける。

これまた正装で談笑していた。

「良太郎。このパンフレットだけどね」

フェイトは良太郎にパンフレットを見せる。

身長差があるので良太郎は腰を落とす。

コハナも覗き見る。

実を言うと、良太郎とコハナはパンフレットを配るだけで、中身は全く見ていない。

「えーと、『仮面ライダー電王LYRICAL人気投票』？」

良太郎とコハナは首を傾げる。

「良太郎達もわからないんだね……」

フェイトは二人の反応を見てそう納得した。

オオカミとペンギンとゾウとドラゴンも仕事を完了したのか会場に入ってきた。

「会場にいる皆様。本日は仮面ライダー電王LYRICAL人気投票にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます！」

「これよりこちらの方が呼びする方はステージにいらしてください！」

タキシード姿の尾崎正義と三浦イツセーが本日の司会兼進行役となっており、マイクを用いて会場内にいる一同に伝えた。

ちなみに三浦が言った『こちらの方』とはオーナーだったりする。

「えー、私が読み上げた方は速やかにこちらのステージまでいらしてください」

オーナーの一言は静かだが、有無を言わせぬ迫力があつた。

「「それでは只今より仮面ライダー電王LYRICAL人気投票を開催いたします！」」

尾崎と三浦が同時に言い放つと、開始の合図スタートとなった。

会場内が今まで以上に盛り上がった。

良太郎、フェイト、コハナはその異様な盛り上がりにより若干気圧されていた。

「な、何か凄く盛り上がってるね……」

「ちょ、ちょっと怖いくらいに、ね」

「ふ、二人とも！ 圧されちゃ駄目よ！ 今から始まるんだから！」

コハナは二人に発破をかける。

二人はステージで司会兼進行をしている尾崎と三浦を見た。

「では今から十位の発表になるけど、選ばれた二人に対して三浦くんはどう思ってるう？」

「これ、二人なのかい？ どう見ても一人と一匹という方が妥当なんだが……」

尾崎と三浦はこれから呼びつける二名についてコメントを述べる。

「発表いたします。第十位は……」

オーナーが十位の人物が記載されている紙を手にして、勿体ぶっている。

その間にドラムロールが流れる。

「高町恭也さん、ユーノ・スクライア君でえす！」

ドラムロールが停まると同時に、オーナーは発表した。

会場内が盛り上がり、呼ばれた二人（一人と一匹）がステージに向かっていく。

拍手で送られる恭也とユーノ（フェレット）。

ステージに立つと、三浦が一人と一匹に関して読み上げていく。

「とある方からのコメントです。高町恭也さんについてですが、正直投票されるとは思いませんでした、とのことです。次にユーノ・スクライア君についてですが、投票期間最終日に入るとは思いませんでした。個人的には好きなキャラクターなので投票されてよかったです、とのことです」

三浦が読み上げた紙は消滅してしまった。

「その、とある方って誰なのさ？ 三浦君」

「さあ、名前書いてないからわからない。十位のお二人には記念品の賞状とお菓子を贈呈いたします」

三浦がそう言いながら、一人と一匹分の賞状とお菓子を渡す。

フェレットが持てるわけなので、結果として恭也が二つ分持つことになる。

「キュキュー（ありがとうございます）！」

「どうも」

ユーノと恭也が頭を下げてステージから降りていった。

ユーノと恭也は高町家とその縁のある人達に厚い言葉を受けていた。一人と一匹は満更でもない顔になっているのはいうまでもないことだろう。

「それでは第九位と行きましょう！」

「第九位に入っていると思っている人達は挙手を！」

三浦の煽りに乗るようにして会場にいる何人もが挙手をした。

「それで、三浦クン。第九位に入っている人に関してはどう思う？」

「色違いで人気って出るのかな？というコメントしか出ないね」

尾崎と三浦が第九位にランクインしている人物に対してそう述べた。

「それでは発表します。第九位は……」

ドラムロールが流れる。

「駅長（黒）です！」

流れ終わると同時に、オーナーは発表した。

またも会場が盛り上がった。

ステージにいつの間にか黒駅長が登場していた。

服装は喪服である。

彼にとっては、イベントだろうが何だろうが関係ないらしい。

「とある方からのコメントです。嘘でしょ？という極めて短いものだが、この方からしても意外といえば意外らしい」

「それでは九位の駅長（黒）さんには賞状とチャーハン対決に用いられるスプーンを贈呈いたします」

尾崎は黒駅長に賞状とスプーンを渡した。

「どもお。それでは仕事を立て込んでおりますので失礼します」
黒駅長は軽く頭を下げると、その場から消えてしまった。

「さあ、どんどん参りましょう！次は第八位です！」

「入っていると思われる方は挙手を！」

三浦の煽りで会場内にいるほとんどが手を挙げた。

「八位に関してはどうなんだい？三浦クン」

「もう人ですらないね……」

三浦のコメントは短くどこか震えていた。

「どーしたんだい？三浦クン。心なしかすごく怯えてる感じがするんだけど……」

尾崎はとりあえず気にしないことにした。

「発表します。第八位は……」

ドラムロールが流れる。

「敵イマジンの方達でえす！」

ペンギンとゾウとドラゴンとオオカミと会場案内をしていた女性――ナオミが仮面ライダー電王LYRICALで電王に倒された敵イマジンの遺影を持ってステージに立った。

「……」

四体の着ぐるみを見て、今度は尾崎が震えていた。

彼は過去に一度、この着ぐるみ達に少々ひどい目にあったことがあるのだから当然といえば当然かもしれない。

「とある方からのコメントです。九位に続いて意外としか言いようがありません。正直投票されるとは思ってもみませんでした。だって。あれ？尾崎君、どうした？」

「い、いや……何でもないよ。ええと八位になった方々には賞状とお線香を焚いて冥福を祈りましょう」

会場内が葬式のように突如暗くなった。

「それでは一時的に暗くなりましたが、もう一度盛り上げていきましょう！」

「第七位に行きますが、ランクインされていると思われる方！拳手を……」

元々が明るいかな天気ともいえる二人なので会場の雰囲気は重いものから明るいものになった。

会場内の何人かが手を挙げる。

十位、九位、八位に比べると挙手する人間の数が減っていた。

「先程に比べると随分減ったねえ。三浦くん」

「ここからは本当に人気のある人物しか入れない領域になりつつあるからね。何せ十位から八位までは順位は違うけど、票数は同じなんだよ」

「じゃあ、どうやって順位決めてたのさ!？」

「投票された順番で決めたんだって」

「あ、そう」

「お二人とも、そろそろ読み上げてよろしいでしょうか？」

オーナーが盛り上がっている司会者兼進行役に目で訴えている。

「あ、は、はい。お願いします」

オーナーはコホンと咳を一つ切ってから、オーナーは唇を動かす。

「第七位は……」

ドラムロールが流れる。

「クロノ・ハラオウンさんでえす!」

「「「ええええええええええええ!」」」」

歓声上がる前に着ぐるみ四体――着ぐるみ4が抗議に近い声を上げた。
フォー

「ありえねえだろ!」

「何でクロノなのさ!」

「それ間違いやろ!」

「納得できない!」

オオカミ、ペンギン、ゾウ、ドラゴンが好き勝手な事を言う始末。

「貴方達はあ!そんなに僕がこの順位だと不服なのか!？」

クロノはS2Uが形を変えているカードを懐から取り出して、デバ

イスモードにしようとしていた。

「「「うん」」」」

着ぐるみ4が頷いた。

「クロノ君！折角のめでたい事なのに落ち着いて！」

「離してくれエイミィ！僕はやっぱり彼等とは一度ハッキリしておかなければならないんだ！」

「そのあたりは第二部でやってくれればいいから、早くステージに行って！」

エイミィに引っ張られながらクロノはステージに上がっていく。

「……えー、とある方からのコメントです。自分も着ぐるみ4同様にかなり驚きました。そもそも投票する人がいたことには驚きです。だって」

「そんなクロノさんには賞状とこちらの書籍『サルでもできる明るい生き方』を贈呈いたします」

「あ。ど、どうも」

クロノはそれらを受け取って、ステージから降りていった。

「さあ、これが終わればいよいよベスト5だねえ。三浦クン」

「尾崎クン、思ったんだけど僕達ってランク外？」

三浦が今になって自分達がランクインされているかどうか不安になっていた。

ちなみにこの二人が登場したのは最終話のみである。

「さあ！次行こうよ！三浦クン！」

「そうだね！尾崎クン！」

二人は空元気に近いかんじだが、気を取り直して自分達の仕事に専念する事にした。

「それでは発表いたします。第六位は……」

ドラムロールが流れ出す。

「アリシア・テストアロツサさんです！」

良太郎がアリシアの遺影を持って、ステージに上がる。

それだけで場の空気はまたも暗くなった。

「とある方からのコメントです。彼女は必ずランクインするだろうと思ってました。だそうです」

「短いね」

「コメントのしようがないからね。ではアリシアさんには賞状と冥福を祈って……」

会場の全員が合掌した。

暗くはなったが、また元に戻った。一度経験すれば耐性というものがつくものである。

「いよいよベスト5になりましたあ！ランクインされている思っている方は挙手を！」

ここまで来ると、先程よりも挙手数が減っていた。

「ここまで来ると、完全に人気のあるなし、だからねえ」

三浦が冷静に解説した。

「それでは第五位の発表をします。第五位は……」

ドラムロールが流れ出す。

「高町なのはさんでえす！」

「ふええええええええ！」

なのはが大声を上げて驚いていた。

「キュキュキュー（なのは、大丈夫？）」

肩に乗っかっているユーノが大声を上げたなのはを心配そうに見る。

（ユ、ユーノ君。わたし、五位なんだね？）

（うん。すごいじゃない！なのは）

（そ、そうだよ。す、すごいんだよね！）

（とにかく、ステージに行った方がいいよ）

(う、
うん)

なのはユーノと念話を終えると、ステージまで歩き出した。

「とある方からのコメントです。最初はなかなか投票されなかったけど、後から結構な追い上げでベスト5にまで食い込みました。さすがTV版の主人公ですね。だってさ」

「そんな、なのはさんには賞状とこちらのデンライナー特別優待券を贈呈いたします」

「あ、ありがとうございます！」

なのはは受け取って深々と頭を下げた。

「それでは第三位の発表です！」

「尾崎クン、次は第四位じゃないのか？」

「実はね、この二人は投票開始から接戦だったらしくて最後まで同票だったから、もう同順位にするしかなかったんだって」

「投票期間は確か、二週間だったような……」

「それでも全く接戦で最後まで決着がつかなかったんだって」

「へえ」

オーナーが読み上げていく。

「発表します。仮面ライダー電王LYRICAL人気投票、第三位は……」

ドラムロールが流れる。

「プレシア・テストロッサさんとモモタロス君でえす！」

「なんだってええええ!!」

オオカミを除く着ぐるみ三体と第七位のクロノが驚きの声を上げた。

「センパイが三位!？」

「これは泣かれへんで！」

「モモタロスだけずるい！」

「貴方の方が僕よりよっぽどいい順位じゃないか！」

オオカミはそんな抗議を右から左に流しながら、衣装を脱いでいく。
「うるせえ！入っちゃったもんはしょうがねえだろ！」

オオカミの衣装を脱ぎ捨てると、そこにはモモタロスがいた。

「へっへえ。三位のお通りだぜえ」

他の着ぐるみ達とクロノに態と煽るように言いながらモモタロスはステージに上がる。

「フェイトじゃねえか。オメエはまだ呼ばれてねえぜ？」

「あ、違うよ。コレを持ってきたんだ」

フェイトがステージに上がるが、それはプレシアの遺影を持っているからだ。

「とある方からのコメントです。モモタロスさんに関しては電王のメインイマジンで投票されたのはモモタロスだけだったのは意外でした。そして、この順位になる事も驚きでした、だそうです。プレシア・テストロッサさんに関しては『フェイトの未来を守るために悪い母親を演じた』ことが、この投票数を獲得したのかもしれないね。だそうです」

三浦が読み上げていった。

「では、モモタロスさんには銅メダルと賞状と翠屋特製プリン無料チケット一年分を贈呈します。プレシアさんには銅メダルと賞状と冥福を祈りましょう」

明るくなった途端に暗くなるという器用な真似を会場にいる全員が黙祷した。

「まさか三位が二人いるとは驚きだねえ。三浦クン」

「ああ、全くだ。さあ残った椅子は、後二つ。一位と二位だけだからね」

「さあて、第二位の発表だけど三浦クンはどう思う？」

「これも三位の二人と同じだね。最初から凄い接戦だったんだよ。一位と二位の票差は何票だと思う？」

「え？何票なんだい？三浦クン」

「一票。どちらが一位になってもおかしくなかったくらいだよ」

「へええ。凄いねえ。では発表をお願いします！」

オーナーは読み上げていく。

「発表いたします。仮面ライダー電王LYRICAL人気投票、第二位は……」

ドラムロールが流れる。

「フェイト・テストロッサさんです！」

「え？あの、わたしが二位、なの？」

ドラムロールが流れ終えても、フェイトは自分が二位という現実をまだ受け止めていない感じだった。

「フェイト！凄じじゃないか！アンタ二位だよ！」

「あ、アルフ……」

使い魔に言われてもいまだにピンとこない。

「フェイトちゃん！凄いよ！二位だよ！二位！」

なのは我が事のように喜んでいる。

「そう……なんだよね。凄いだよね……」

フェイトは何とか現実を受け入れようと自己暗示のようにつぶやく。

「フェイトちゃん。みんな、待ってるよ」

「みんな？」

良太郎がさす『みんな』がいるステージを見ると、

「「「フェイト（ちゃん）！第二位おめでとおお！！」」」

モモタロスとペンギン、ゾウ、ドラゴンがステージで盛り上げていた。

「さ、行っておいで」

「うん！」

フェイトはステージに移動する。

「とある方からのコメントです。投票されるとは予想はしていましたが、ここまで人気があるとは思いませんでした。とにかく作中で

は状況が状況なので一、二を争うくらい書きにくいというのが印象的でした。また一位になってもおかしくないくらいの勢いでした。第二位おめでとうございます。だって」

「フェイトさんには銀メダルと賞状、そしてアクションライナーシリーズに仮面ライダー電王TVシリーズのDVDを贈呈します」

「あ、あの、ありがとうございます！」

フェイトは深々と頭を下げた。

「遂に遂に、ここまで来たねえ。三浦クン」

「ああ、とうとう栄えある第一位の発表だからね」

「一位の人物についてはどう思う？三浦クン」

「ある意味妥当だけど、ここまで人気があるとは思わなかったよ」

「さっすが、僕の未来の義弟！」

「誰が貴様の義弟だ!!」

尾崎と三浦が取っ組み合いが始まった。

オーナーはそんな二人を無視して読み上げていった。

「発表します。仮面ライダー電王LYRICAL人気投票、栄えある第一位は……」

ドラムロールが流れる。

一位の発表なため、通常よりは長い。

「野上良太郎君です！」

発表と同時にバタアアンと妙な音がした。

音の原因は気を失った良太郎だ。

大抵の事には気を失わなくなった良太郎だが、こればかりは驚いたようだ。

「良太郎！大丈夫!？」

フェイトが良太郎の側に寄る。

「まったく、世話のかかる一位だぜ」

「本当だよ。結局僕達この着ぐるみ脱げなかったし……」

「まあ、次頑張ればええやないか」

「次ガンバロー！」

モモタロス、ペンギン、ゾウ、ドラゴンが気絶した良太郎をステージまで運んで、モモタロスが良太郎にカツを入れた。

「！！！」

良太郎は意識を取り戻した。

「えと、僕が一位？」

「ええと、とある方からのコメントです。二位のフェイト同様に投票開始から凄い勢いで投票されていました。作中で主人公でありながらも、物凄く書きにくい人物だと思っています。第一部を終えた今でも書きにくいという気持ちは拭えないですね。第一位、おめでとうございます！第二部も頑張って、だってさ」

「あ、ありがとうございます」

「第一位の良太郎君には金メダルと賞状とトロフィーにそして魔法少女リリカルなのはグッズを贈呈します！」

「あ、ありがとうございます」

良太郎はそれらを素直に受け取った。

「とうとう終わったねえ。三浦クン」

「ああ、やっぱり僕達は投票されなかったんだね」

「次頑張ろう。三浦クン」

「うん」

こうして特別会場で行われた仮面ライダー電王LYRICAL人気投票は幕を閉じた。

第一位 野上良太郎

第二位 フェイト・テストロッサ

第三位 モモタロス

プレシア・テストロッサ

第五位 高町なのは

第六位 アリシア・テストロッサ

第七位 クロノ・ハラオウン

第八位 敵イマジン' S

第九位 駅長（黒）

第十位 高町恭也

ユーノ・スクライア

第二部でも終了後には行いますのでそのときは奮ってご参加ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6520o/>

仮面ライダー電王LYRICAL人気投票

2011年10月5日03時23分発行